
少女の願望

魅覇鎖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女の願望

【Nコード】

N9420S

【作者名】

魅霸鎖

【あらすじ】

母親と大喧嘩をした少女は、夜の森に入る。その森で出逢ったのは…

（前書き）

急に書きたくなって、衝動書きした代物です。

現代の、どこかの街に、一人の少女が住んでいた。その少女は、いわゆる”引きこもり”で、現実の世界を嫌い、いつも紙の上の世界に憧れを抱いていた。

その少女は、決して恵まれぬ環境に生まれたわけではない。二親ともに愛情を注がれて育ち、世間一般から見れば”幸せ”とも言える生活を送って来た。

…だがある日、少女は母親と喧嘩をし、その家を飛び出してしまった。少女が行った先は、家の近所にある、最近少女が毎日のように通っていた森だった。その森に入り、街の明りが遠ざかると、少女は途端に泣き出した。

「…！っ…！！」

声にならぬ声を出しながら、少女はぼろぼろと涙を流す。その涙は後悔の涙か、はたまた自分を理解してくれぬ母親に対する怒りの涙か。

…どれほど泣いたのだろうか？少女は自分の傍に、誰かが立っている事に気が付いた。

「…？誰？」

少女はそう問いながら、俯かせていた顔を上げ、その誰かを視界に捉える。その瞬間、少女は自分の前に立っている者が、”人”ではないと気付いた。その身体は、ほのかに光っていたのだから。

「…来るか？」

「……………」

誰かは、そう言いながら少女に向かい、やはりほのかな光を放っている手を伸ばす。少女は少し躊躇ったが、自分もまた手を伸ばし、その光る手を、握った。

（何かこれ…漫画みたい…）

そうした理由は、母親との喧嘩の熱がまだ冷めていない…ということとその他に少女がいつも憧れていた漫画の世界の出来事のようなことから…ということが、大きかっただろう。

誰かに手を引かれ、少女は森の中を歩き出した。

少女の握る、誰かの光る手は、まるで氷のように冷たかったが、その冷たささえ、今の少女には気持ちよく思えた。

二人はやがて、森を抜ける。だがそこに広がっているはずの、少女がよく知った街は無く、代わりに大層立派な屋敷が建てられていた。手を引かれるまま、少女はその屋敷へと足を踏み入れる。そのまま少女は、屋敷の一室へと通された。

「…あなた…妖怪か何か？」

「……………」

部屋に通された少女は、ここまで自分を連れて来た誰かに向かい、そう問い掛ける。誰かは、何も答えずに居るが、構わず少女は言葉を繋いだ。

「…人じゃないよね？人の身体は、光らないもの。」

「…仮に、」

「？」

誰かは、自分より背の低い少女の方を見下ろしながら、口を動かす。

「…仮に俺が妖怪だとして、お前は どうする？ 逃げるか？」

誰かの問いに、少女は首を横に振る。

「…じゃあ…どうする？」

「んー…あたしのこと、殺してもらおう？」

少女の言葉に、誰かは金色の鋭い瞳を、僅かに見開く。少女はそのまま、言葉を続けた。

「…さつきさあ、母さんと大喧嘩、しちゃったんだよね。あんな人のところに帰りたく無いし…仮に帰って、仲直りできたとして、やつぱりまた同じようなこと繰り返しちゃうだろうし。…それに、このまま生きて、大人になったとしてもさ、よく知りもしない誰かにこき使われたり、顔も名前も知らない誰かの為に働いたり、笑いたくも無いのに笑ったり、嫌なのに首を縦に振ったり、…そういうの、想像しただけで吐き気がしちゃうから。…だから、もしあなたが本当に妖怪だったら…あたしを、殺してもらおう。人が人を殺したら、この国じゃ大問題だけど、妖怪に殺されたんだったら、人の世界であたしは行方不明扱いになるし、人を殺すのなんて、妖怪の世界じゃ大したことじゃないでしょう？」

ほのかに笑みを浮かべながら、少女は一気にそこまで言うと、一度黙り、相手の反応を待った。

「く…くく…」

「…？」

「く…はははははは！…！」

「な……」

今まで黙っていた誰かは、途端に腹を抱えて笑い出した。それは予想外だったのか、少女も面食らっている。

「くく……妖怪に逢って頼む事が”殺してくれ”、か……良いぞ。殺してやろう。」

「え……」

そう言うなり、誰かの手元には光が集まり、次の瞬間そこには巨大な鎌が現れた。

「…命乞いをするなら、今が最後のチャンスだぞ。人間。」
「……………」

誰かの言葉に、少女は黙って、首を横に振る。

「…そうか。」

少女の行動に、誰かはそれだけ言うと、鎌を振りかざした。

「…ありがとう。」

少女がそう言うと同時に、鎌が、振り下ろされた。

（後書き）

お粗末さまでした。気が向けば、続編を書くかもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9420s/>

少女の願望

2011年10月6日17時10分発行